

石川県立美術館だより

平成13年8月1日発行 第214号



富嶽三十六景 神奈川沖浪裏

生誕二四〇年

北斎展

7月28日(土)～8月19日(日)会期中無休

目次

生誕二四〇年 葛飾北斎展.....	2	美術館小史・余話(13).....	6
加賀藩の美術工芸.....	3	美術館の本、企画展示室.....	6
古九谷・再興九谷名品展.....	3	各地の展覧会、貸出中の所蔵品.....	6
石川の人形.....	4	企画展TOPIC、八月の行事案内他.....	7
常設展示室 主な展示作品.....	4	所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信.....	8
講演会記録(吉田三郎展).....	5		

ホームページアドレス <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

生誕二四〇年 北斎展

7月28日(土)~8月19日(日)会期中無休

主催 / 北陸中日新聞・石川県立美術館・石川テレビ放送

後援 / 石川県・石川県教育委員会・金沢市

金沢市教育委員会・NHK金沢放送局・エフエム石川

協賛 / 北陸電力

協力 / 葛飾北斎美術館

葛飾北斎(一七六〇~一八四九)は、江戸後期に活躍した浮世絵師で、存命時代から西欧に紹介され、印象派の画家など、多くの芸術家に多大な影響を与えた画人として知られています。その功績は、ウィーンで開催された世界平和協議会で、世界文化巨匠として顕彰されました。また、アメリカの『ライフ』誌が行ったアンケートによる、この千年間に偉大な業績をあげた百人の中に、我が国で唯一ランク・インした人物ということで、大きな話題を呼んだのも記憶に新しいところです。

本展は、九十歳で亡くなった北斎の画業を、約二百点の作品によって、概観できる構成になっています。肉筆画・画稿では、最近再発見された青年期の作品

から最晩年の傑作「赤壁の曹操図」(図)まで、各年代の特徴を顕著に示す作品を展示します。錦絵では「富嶽三十六景」(図)、「諸国名橋奇覧」

花鳥画といった代表作をはじめ、二十歳のデビュー作「若井半四郎のかしく」から最後の錦絵まで、百花繚乱の作品群を紹介します。

摺物・絵暦では、百年ぶりに再発見された「冷水売り」(図)が、現在もっとも年代の早い摺物として注目されます。

絵本や読本などの版本には、「北斎漫画」のほか、本展に出品される以外に、国内に遺存していない珍しい作品や、これまでほとんど公開されることのなかった絵手本「北斎写真画譜」など、逸品が含まれます。

こつした北斎の作品を見ていくと、その内容は、役者絵、美人画、風景画、花鳥画、読本挿絵、絵本など実に多彩で、それぞれが独特の魅力を呈しているのがわかります。初期から晩年まで、その偉業をたどる本展は、あらためて現代の我々を魅了し、驚きと感動を与えてくれることでしょう。



冷水売り



赤壁の曹操図



富嶽三十六景 凱風快晴

観覧料 当館友の会員は受付での会員証提示により、団体料金でご覧になれます。	一般	個人
	1,200円	
	高・大生	個人
	800円	
	小・中生	個人
	600円	
一般	団体(20名以上)	
1,000円		
高・大生		
600円	団体(20名以上)	
小・中生		
400円	団体(20名以上)	

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

加賀藩の美術工芸

7月27日(金)~8月28日(火)

加賀藩主前田家は、藩祖利家以来、歴代藩主が文化事業に深い関心を示しています。中でも三代藩主利常(一五九三~一六五八)は傑出した文化大名として知られています。後水尾天皇や小堀遠州などとの親交も深く、京文化を受容し、平安王朝の美の精華ともいふべき名だたる名筆や、名物茶器を収集しました。一方その目は海外にまで及び、長崎を窓口にも輸送された貴重な名物裂や中国の陶磁器、漆器などを豊かな経済力を背景に購入し、加えて東インド会社を通じてオランダのデルフト陶器を注文するなど、その美意識には幅広いスケールの大きさを感じ取ることができます。

当初、武器や武具の制作・修理を行っていた御細工所は、利常の代に前田家の生活調度、いわゆる大名道具を中心とする美術工芸品を制作するところに改められました。さらに五代綱紀の代に整備・拡充されました。利常は、京都の五十嵐道甫や江戸の清水九兵衛といった蒔絵の名工、あるいは京都の後藤頭乗・程乗といった金工の名工たちを招き、高禄をもって召し抱え、御細工所の指導者として後継者の育成に力を注ぎました。また、大聖寺藩では古九谷の窯が興っています。綱紀の代には、初代宮崎寒雉が侘びた茶の湯釜を造り、初代大樋長左衛門も大樋焼を始めており、友禅染なども興りました。このようにして、加賀藩の美術工芸は江戸や京都と肩を並べるまでに向上し、加賀蒔絵・加賀象嵌・古九谷・加賀友禅などの名は、全国に広まり、その技はその後も歴代藩主により保護育成が続けられ、明治以後も工芸に対する諸施策が石川県により続けられ、今日の石川県の工芸の繁栄へと、結びついています。

今回は、重文「アエナス物語図毛綴壁掛」をはじめ、名物裂、加賀象嵌鏡、加賀友禅掛幅、加賀蒔絵調度品、古九谷、中国陶磁、陣羽織、狩野探幽の絵画など二十九点を展示します。(南 俊英 学芸第一課長)

今回は、九谷陶磁史上古九谷に次いで高い評価を受けている吉田屋窯について紹介します。

吉田屋窯は、加賀大聖寺の豪商豊田伝右衛門成元が開いた窯です。豊田氏は屋号を吉田屋といい、酒造業を広く営む一方、町年寄役、銀方役など大聖寺藩の用務を勤める代々の家柄町人です。伝右衛門はその四代目にあたり、漢学、詩文、和歌、書をたしなみ、江戸後期の儒者で画家でもあった皆川淇園と交流を持ち、石翁と号するなど、豊田家歴代中もつと博學多趣味の人でした。

吉田屋窯開窯のきっかけとなったのは、当時若杉窯で職長をしていた本多清兵衛、養父貞吉の意志を継いで古九谷窯を再興しようとする門人粟生屋源右衛門と、しばしば古九谷古窯址を訪れ、窯址や陶土の調査などを行っていたのを伝右衛門が聞き、二人の希望を取り入れて援助することになったからです。文政七年(一八二四)七月に初窯を焼いたと思われませんが、しかし、場所が遠隔の山奥にあることから、生産性の効率が悪く、実際に操業したのは翌八年夏頃までの約一箇年でした。九年春には、山代の越中谷に窯を移して再び操業しますが、十年二月に五代を相続した息子伝右衛門(五郎作)、六月に本人が逝去するなど不幸が続き、天保二年(一八三一)には、借銀過重により経営困難となって廃窯します。

吉田屋の特色は、緑・黄・紫・紺青の四彩を用いた古九谷青手様式の塗埋手で、基本的には古九谷の構図を踏襲しています。画題は蘭亭曲水、六歌仙といった当時の文人趣味を反映したものが多く、器種も食器類など多種多様なものを焼成し、平鉢は古九谷同様、一品製作的でそれが今日高い評価を受けている所以ですが、これがまた経営を圧迫し廃窯に追い込んだ遠因ともなっています。

(末吉守人 普及課長)

色絵椿水仙文夜字形香炉 吉田屋窯



常設展示室(第2展示室)

特集

古九谷・再興九谷名品展

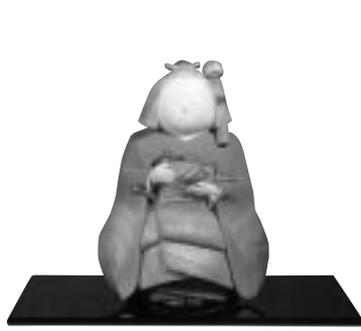
後期 7月27日(金)~8月28日(火)

常設展示室 第5展示室)

特集

石川の人形

7月27日(金)~8月28日(火)



浄苑 下口宗美



月の光に 齋藤悦子

人形は鑑賞や愛玩用として、私たちの生活に大変なじみ深いものです。しかしそつであるために、様々な技法を駆使した美術工芸としての人形への理解は、他部門の工芸ほどには一般に浸透していません。

今回の特集は、石川県の人形作家の中から、下口宗美・紺谷力・井口十糸・室田芳子の四人の作品を、館蔵品と寄託品を中心に展示します。また、石川県にゆかりがある日展の人形作家・齋藤悦子のご遺族から、ご寄付いただいた十点の作品を一堂に公開し、美術工芸品としての多彩な人形の世界を紹介するものです。この中から、下口宗美と齋藤悦子についてご紹介しましょう。

下口宗美は石川県の人形作家の中で先駆的な存在です。また指導者として多くの作家が門下生となり、巣立っていったことでも知られています。明治三十七年に加賀市で生まれ、陶芸家の初代中村秋塘に師事しました。さらに京都で、素焼き人形の北村祥鳳に師事した後、木彫人形を独学して、昭和二十一年帰郷し、木彫人形作家として活動を始めました。昭和二十四年に第一回現代人形美術展で特選を受賞以後、日展と日本伝統工芸展で活躍して、日本工芸会正会員となっています。昭和五十九年に没しましたが、その影響は現在も生き続けており、情感豊かなその作品は、多くの作家を見守り、育てた作者自身を彷彿とさせます。

齋藤悦子は昭和三年に旧満州撫順に生まれましたが、父親の出身地であったため、戦後の一時期金沢に在住していたこともあり、金沢は思い出深い土地であったようです。彫刻家の佐藤忠良に造形美術を学び、昭和三十七年に初入選してから、平成十一年に没するまで日展で活躍し、評議員にもなりました。木という素材の持つあたたかみを感じさせる、すらりとした優美な女性像を特徴としています。

本展開催にあたって、貴重な作品を貸与されたご蔵各位に深く感謝いたします。(文中敬称略)

(寺川和子 学芸員)

前田育徳会展示室

特集 加賀藩の美術工芸

アエネアス物語図毛織壁掛 ヘルギー (16世紀)

瓢 文銀象嵌鏡 木坂重宗

達磨渡江図 狩野探幽

黒塗布目引出絵替絵具 筥 青磁八葉蓮華鉢

●第1展示室

色絵雌雄香炉 野々村仁清

色絵雄香炉 野々村仁清

●第2展示室(古美術)

特集 古九谷・再興九谷名品展

古九谷 色絵鶏草花図平鉢 春日山窯

色絵鹿図呉須赤絵写鉢 粟生屋源右衛門

●第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

望郷を歌う 鴨居 玲

貝殻図譜 藤本東一良

素描 南 政善

馬ならぶ 彫塑・造形 坂 坦道

赤とんぼ 波乗り 山瀬晋吾

●第5展示室(工芸)

陶芸・漆工 吉田美統

釉裏金彩鉄仙文大皿 大場松魚

●第6展示室(日本画)

山水図 梶野玄山

送電柱 下村正一

一心不乱図 高村右暁

●観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



送電柱 下村正一



貝殻図譜 藤本東一良

常設展示室

主な展示作品

7月27日(金)~8月28日(火)

●=国宝 =重要文化財 =石川県指定文化財

講演会記録

父吉田二郎を語る

講師 吉田 渉氏
わたる

父吉田二郎は、明治二十二年、金沢市に生まれました。県立工業学校から東京美術学校に入ります。が、県工時代の二人の恩師（板谷波山と青木外吉）の影響とつながりは、その後の人生にも大きな影響を与えたようです。三郎が後年

作ることとなる二人の恩師の胸像は、その慈愛あふれる人柄や面影が、巧みに伝えられています。

三郎は在学中から文展入選を果たし、「第十二回文展で特選、翌年の第一回帝展で引き続き「老坑夫」で特選となり、三十歳にして作家の地位を確立しました。以降、帝展、日展、並びに白日会展で活躍します。また、教育者としても多摩美術や教育大で後進の指導にもあたり、その下から有望作家が多数輩出しています。

東京美術学校卒業後は、恩師である板谷波山を慕って田端に居を構え、空襲で罹災後も同地にアトリエを再建し制作に励みました。居のあった田端は山手線内にあり、一キロ四方に我が国を代表する文士（芥川龍之介、室生犀星、萩原朔太郎、菊池寛など）や美術家（波山、三郎の他に、鍔金の香取秀真、日本画の小杉未醒や山田敬中など）が多く集まった地域で、「田端文士村」と称され、また「日本のモンパルナス」とも呼ばれていました。現在では記念館が設立されていますが、当時の関係者は私を含めわずかとなくなっています。三郎はここでも多くの文士、美術家と交わり、人望も厚く面倒見も良かったようで、「三郎さ

ん」と愛称されていたとのことです。大勢の石川県人や彫刻のお弟子さんも集まり、いろいろな話を伺ったことが思い出されます。例えば、彫刻の関係者としては都賀田勇馬さんの話がとても面白く、工芸の関係者では、松田権六さんとの思い出が印象深く思い出されます。現在石川県立美術館に三郎の作品が多く収蔵されているのも、松田さんが仲介となってくれたからです。その他の郷土出身の美術家の面白いエピソードも数多く思い出されます。郷土出身文人とのつながりでは、室生犀星さんとは殊のほか付き合いが深かったようで、氏の作品にも三郎が登場してきます。

三郎の作風は巷間伝えられる通りで、男性像中心ですが、題名は東洋的志向性も加わり、抽象的なものも多く、三郎の心象を表しているものと思われれます。中には「満蒙風景」など、ロバに乗った飄逸とした中国服の人物像や、猿や兎などの動物彫刻にも巧みであり、さらに胸像は、モデルの特徴を巧みにとらえ、本人以上に本人らしい出来映えと称されたものも少なくありません。また数少ない女性の作品では、女優の原節子さんの首が印象深く思い出されます。この原さんのモデルの作品を含め、戦災などの影響もあってか、行方不明の作品が多くありますが、もし現存するならば、情報をお寄せいただき、再会できることを楽しみにしております。アトリエなどにあつた戦前の作品は、戦災でほとんど焼失してしまいました。総じて戦前の作品には、若い時の気力と感性によって出来た渾身の作品が多かったと述懐していました。そんな中、宮沢元総理の祖父に当たる小川平吉鉄道大臣の胸像については、戦中供出で、一旦出されたのですが、思慕尽きぬ村人らがこっそりと持ち帰り、秘かに温存していたとのことです。その胸像は今も長野の旧邸に安置されています。私共にとりましては大変うれしいことです。

三郎が東京に出てからも郷土とのつながりは深く見

えます。三郎の作品で一番大きかった「前田慶寧公像」などは、供出によって今日では見ることが出来ませんが、戦後の作品が今でも金沢市内の各地で見ることが出来ることはとても嬉しく思っております。当地にある作品の中では、「杜若像」が印象深く思い出されます。金沢駅前に建立された「杜若像」の纏が、石川県の主流である加賀宝生流のものと異なる事によって起こった問題などは、今ではよき思い出もなっています。

家庭人としての三郎は子煩悩で、私もよく動物園に連れて行ってもらいました。それは実は、作品となる猿、羊、馬などの写生を兼ねてのことでした。また、我が家の庭には七面鳥、猿、犬が飼われておりましたが、それぞれ作品のモデルとなり、今でもプロンズ像で生き続けています。三郎はまたとてもユーモアあふれる人物でもあり、相撲好きであったとも聞いております。

本展では、十数年ぶりに再会した作品もあつて懐かしい感慨に浸ると共に、三郎作品以外で、私も初めてお目にかかる作品もあり、今回の重文指定の審議で、原型が重文に答申された、朝倉文夫作「墓守」も出展されており、また一般に見られない美校卒業制作など、総じて迫力のある優れた作品が一堂に並び、まことに見事です。また珍しいものとして、板谷波山作の鳩杖観音像や、朝倉文夫、北村西望、伊東深水の書なども出ております。出来るだけ多くの人々にご覧いただくことを願っています。

（本稿は、今春開催された「彫刻家吉田二郎展」にちなみ、四月二十八日に当館で行われた吉田渉氏による講演会「父吉田二郎を語る」の内容を、当館の責任で要約したものです。当日は展示作品と、今では見ることの出来ない作品のスライド写真解説をはじめ、彫刻家、田端文士村の住民、さらには教育者や父親としての顔をも交えてのお話しでした。）

美術館小史・余話

13

嶋崎 丞すまむ 当館館長

旧石川県美術館が昭和三十四年に開館してから、一番の悩みの種は何といつても収蔵品の不足であった。このシリーズの(7)「展示室の運用」(第二〇八号)で述べたように、県から引き継いだ作品で展示可能なものは二百点あるかないかという状況であったため、コレクターや作家から作品を借用して、常に展覧会を開催していかねばならなかった。しかしこうした運営にも何か限界があり、また財政的にも厳しい時代であったので、作品を借用するより、寄託を進めるべきだという意見が、運営委員より出された。とはいえ自分の家の財産ともいふべき美術品を、長期間美術館へ寄託するというようなことは初めてでもあり、言つは易しで実現はなかなか困難であった。こうした時に、現在の当館の目玉となっている、国宝の雉香炉を寄附された故山川庄太郎さんが収集された茶道美術の一括コレクションが寄託されることになった。昭和三十七年のことである。山川庄太郎さんは、亡くなられる直前に、コレクションが散逸することを恐れ、財団法人を組織して管理を委託し、それを美術館へ寄託することを望まれていた。そのことを財団役員の方々が実現されたわけである。山川さんはその実現を見ないまま、昭和三十六年十二月二十二日に他界された。その後このコレクションは、現在の美術館開館にもない一括寄附されて、当館コレクションを形成する一つの柱となっている。

改めて山川庄太郎さんと旧財団関係者に深く感謝の意を表したいと思う。

山川コレクション 茶道美術品収蔵をめぐって

美術館の本

石川県立美術館所蔵品図録	税込定価(円)	三、五〇〇
没後10年 高光一也展		二、〇〇〇
石川県立美術館所蔵 茶道美術名品図録		二、五〇〇
加賀藩一代藩主前田利長の菩提寺 瑞龍寺展		二、三〇〇
15〜20世紀のロシア美術 イコンと絵画		二、〇〇〇
日本のわざと美展 重要無形文化財とそれを支える人々		二、〇〇〇
前田利為と尊經閣文庫		二、〇〇〇
工芸作品と図案 創造への思考		二、〇〇〇
前田利家没後400年 利家が生きた 桃山時代の美術		二、五〇〇
没後25年 写実と幻想の巨匠 宮本三郎		二、三〇〇
初公開 欧州随一の日本美術コレクション ランゲン夫妻の眼		二、〇〇〇
石川県立美術館所蔵 九谷名品図録(改訂版)		二、〇〇〇
没後15年 一期は夢よ 鴨居玲展		二、〇〇〇
彫刻家 吉田三郎		二、〇〇〇

ミュージアムショップで販売中!!

郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。
(☎〇七六 二三一 七五八〇)

企画展示室

第11回北國水墨画展

八月二十四日(金)〜二十八日(火)

(第7・8・9展示室)

石川県内の水墨画愛好団体を網羅した統一展です。近年、愛好者の増加と作品の向上が著しい県水墨画界の結束を図るとともに、愛好者拡大を目指すねらいの展覧会で、作品は広く愛好者から公募して審査し、入選、入賞作に加えて委嘱作品も併せて展示し、水墨画の魅力伝えるものです。

入場料 一般・大・高生 五〇〇円(四〇〇円)

中学生以下無料 ()内は団体料金

当館友の会会員は、会員証提示により団体料金
連絡先 金沢市香林坊二五 一北國新聞社事業局

☎〇七六 二六〇 三五八一

各地の展覧会

八月

開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。	
菅原道真没後二〇〇年 天神様の美術 7/10〜8/26	
東京国立博物館(東京都台東区・〇三 三八三 一一一)	
「油画を読む 明治期名品の研究と修復」展 8/7〜9/24	
東京藝術大学(東京都台東区・〇三 五六八五 七七五)	
近衛家源 一風雅の探究 後期 8/11〜9/9	
宮内庁三の丸尚蔵館(東京都千代田区・〇三 三三三 一一一)	
口タンと日本展 8/19まで	
愛知県美術館(名古屋市東区・〇五二 一九七一 五五一)	
ローリー・トビー・エディンソン ーからだへの瞑想 8/22〜9/2	
国立国際美術館(吹田市・〇六 六八七六 二四八一)	
仏舍利と宝珠 ー釈迦を慕つ心 7/14〜9/2	
奈良国立博物館(奈良市・〇七四 一一三 七七七一)	
川西英の新・旧「神戸百景」 7/20〜9/2	
〜川西祐三郎作品とともにたどる20世紀の神戸の姿〜	
神戸市立博物館(神戸市中央区・〇七八 三九一 〇〇三五)	

貸出中の所蔵品

裸婦像 宮本三郎筆
阿修羅 宮本三郎筆
計二点

展覧会 和と洋 ふたつの文化の間で
会期 七月十七日(火)〜九月十六日(日)
会場 小松市立宮本三郎美術館

重要美術品・石川県指定文化財

紙本著色祇園会図 伝長谷川久蔵筆
計一点

展覧会 長谷川等伯シリーズ 長谷川派の絵師たち
会期 八月二十五日(土)〜九月二十四日(月)
会場 石川県七尾美術館



秋のマロニエ文花器 ドーム ナンシー市立美術館蔵(右)
マロニエ葉図 ベルジェ ナンシー市立美術館蔵(左)

企画展TOPIC

ドーム兄弟

十九世紀末のヨーロッパを席卷したアル・ヌーヴォー運動。この中で生まれた作品の大きな特徴は、自然を究極の原点とした、曲線によるデザインの手芸品であることです。規律正しい直線や直角を排除した、自然で自由な曲線からなる作品には、植物や昆虫などを大胆な構図で描かれたものが多く見られます。前々号で紹介したガレは、ガラスに様々な技法を駆使した作品で注目され、ナンシー派のリーダーと目されています。同じナンシーで、ガレの成功に触発され、ガラス工芸に手を染めたのが、オーギュスト・ドーム（一八六四～一九三〇）の兄弟です。

ドーム兄弟は、前々回にご紹介したエミール・ガレと並んで、アル・ヌーヴォーやナンシー派を語る上で欠かせない人物です。ガラス工芸が伝統的な産業であったナンシーで、事業が振るわなかったものの彼らの父も工房を持っていました。それを長男オーギュストが引き継ぎ、続いて三男アントナンも製造部門に参加、ドーム社がスタート

しました。

ガレに倣ってガラス芸術を目指し、新しい技法を開発し、一八九三年のシカゴ万博で注目されて、一九〇〇年のパリ万博で大きな成功を収めました。基本はあくまで伝統的なかたちのテーブルウェアであり、そこに本物そっくりの立体的な植物や昆虫を熔着させるという、わかりやすい作風が特徴です。

これらはガレの作品と比べると、やや硬さが感じられるのですが、もともと日用品を製作していたところに、いわゆる芸術的作品を作り始めたのが、ドームの工房であり、また協力者との共同製作によって様々な作品を生み出すという体制を取っていました。画家アンリ・ベルジェや木工家ルイ・マジヨレル、ステンドグラス作家ジャック・グリュールなどが参加し、本展出品品のような優れた業績を残しています。

アル・ヌーヴォーの旗手として、様式にこだわりの続けたガレの工房は、運動の終焉とともに衰退し、一九三二年に操業をストップしました。対して柔軟な体制で時代の波をくぐり抜けたドーム・クリスタル社は現在も製作を続けています。同じ運動に端を発しながら、それぞれ違った運命をたどった二つの工房に思い

八月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
8/4(土)	土曜講座	保存のはなし	講義室
8/11(土)	土曜講座	やきもの探訪 吉田屋窯	講義室
8/12(日)	月例映画会	日本のこころ 浮世絵(30分) 浮世絵版画 大蔵半兵衛・村田勝麿(25分)	ホール
8/18(土)	土曜講座	人形鑑賞の手びき	講義室
8/19(日)	CDコンサート	バッハのカウンタータ(約45分)	ホール
8/25(土)	土曜講座	ファン・アイク 人と芸術	講義室
8/26(日)	月例映画会	墨龍「加山又造」(27分) 衣装人形 堀柳女(25分)	ホール

全館休館日は八月二十九日(水)・三十一日(金)です。

次回の展覧会

企画展 花と装飾 ナンシー派展 (第7・8・9展示室)
特別陳列 作庭記の世界 (第2展示室)
特集 前田家名物裂の精華 (前田育徳会展示室)
特集 館蔵優品展 (第3・6展示室)
九月一日(土)～二十四日(月・振休)
以上の展覧会はすべて第18回全国都市緑化いしかわフェア協賛です。

を馳せながら、世紀末のヨーロッパを飾った様式の展覧会をご覧になるというのはいかがでしょうか。

(寺川和子 学芸員)

第18回全国都市緑化いしかわフェア協賛「花と装飾 ナンシー派展」九月一日(土)～二十四日(月・振休)



催眠術 '80A

吉田富士夫

昭和4年（1929）～平成13年（2001）

昭和55年（1981）

第34回二紀展 文部大臣賞

縦162.5 横129.5（cm）

作者は旅芸人の道化師や手品師、サーカスをテーマに幻想的な画面を描き続けました。それは幼い頃に観た粟ヶ崎遊園での少女を宙に浮かべる手品の想い出や、後年芸術磁器画家としてスペイン滞在中に、繰り返し通ったサーカスの喧噪と孤独感が根底にあるのだといえます。

この作品は目の詰んだキャンバスに透明な油絵具を何層もかけ、陶磁器を連想させるなめらかな絵肌を持ちます。淡い色調の中に、催眠術をかけられた二人がスッと浮かんでいきます。それをみてホォーと歓声をあげる二人はその助手なのでしょうが、あるいは次に催眠術をかけるために宙に浮かぶのを待っているのでしょうか。人間が

宙に浮かぶという通常あり得ない情景を、マジックの名を借りて当然のごとくに描きえるところに、このテーマの妙味があります。

吉田富士夫氏は昭和四年金沢市生まれ。二十一年石川県立工業学校図案科卒業。二十四年に第三回二紀展初入選、宮本三郎に師事し、以後二紀会に出品を続けました。二十九年から四年間、陶芸技術が評価されてスペインに招かれて指導。五十一年二紀展宮本三郎賞。五十五年本作で文部大臣賞を受賞。二紀会の重鎮として長く後進の指導につとめられました。

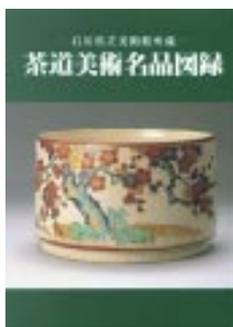
（二木伸一郎 学芸主査）

ミュージアムショップ通信

焼けつくような盛夏。表紙だけでも少しは涼しげに。

さて今月号の「美術館小史・余話」では、山川コレクションが当館に寄附された時のウラ話が紹介されていますね。寄附された茶道具関係は百三十一点！。おかげさまで当館所蔵の茶道美術部門は質、量ともに、とても充実したものとなっております。ですから、他県美術館の展覧会へまとめで貸し出されることもあり、最近でも平成十一年三月の茶道資料館（京都）、今年三月の福井県立美術館で、それぞれ当館所蔵品を中心とした茶道関係特別展が開かれました。

さ、そこで、「県美にある茶道美術の名品の全貌を知りたい！」という熱いご要望にお応えしたのが、石川県立美術館所蔵 茶道美術名品図録（定価二、五〇〇円）です。山川コレクションをはじめ、これまでに収集された茶道美術の名品百五十九点をカラー写真で紹介。しかもすべて解説付きというのが茶道ファンにはありがたい。この解説部分だけでも四十ページ近くあるんです。当ショップでは売れ行き常に上位にランクされる、定評ある一冊です。郵送希望の方は総務課へおたすね下さいね。



石川県立美術館所蔵
茶道美術名品図録
（定価2,500円）

休館日

八月二十九日（水）～三十一日（金）

石川県立美術館だより

第二一四号 平成十三年八月一日発行

〒九二〇〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六（一三一）七五八〇

FAX 〇七六（一三四）九五五〇